



名を呼ばれて袖のカーテンから進み出、中央一段高い壇上に上がると、ギュンターはその広間にずらりと並ぶ面々を見渡す。

自分が新たな中央護衛連隊長に就任したと告げられた後の、挨拶をする為に。

西領地(シュテインザイン)は彼に取っては故郷。

現に横には西領地(シュテインザイン)の素晴らしい護衛連隊長、ダンザインが壇下で控えている。

事実上は自分の部下。

しかしダンザインは同時に『光の王』の末裔、神聖騎士団の長でもある。

ダンザインを見つめると彼が一つ、頷く。

ギュンターは西領地(シュテインザイン)護衛連隊の隊員、400名余りがズラリと整列し自分を見つめる視線を意識し、口を、開こうとした。

「...ギュンターなんだろう？」

どうしてちっとも家に帰って来ず、こんな所に居るんだ？」

突然の聞き覚え有る声にぎょっ！として、慌てて声の方向を見る。

今ではすっかり成長した、かつて自分がおしめを変えた末っ子、ラッツェのまだ若い、が遅しく成長した姿が、ずらりと居並ぶ護衛連隊騎士達の左後方に、伺い見える。

「.....」

ギュンターの口が閉じるのに、補佐のディンダーデンは壇下で腕組み、横に俯き大きな吐息を吐き出し、ダンザインも困った様な表情をする。

「ちっとも帰って来ないから！

お袋が、かんかんだぜ！

いったいどれだけ音信不通すれば気が済むんだ？

家族全員でどっかで今頃骨に成って土塊と同化して行方も知れないと！

葬式の話迄出てるのに、ちゃっかりそんなとこで顔出して、何やってんだ！

どうして知らせの使者くらいよこさない！

あんまり不義理だと、思わないのか?!!」

広間の全員が、新しい中央護衛連隊長の挨拶を出迎えようと思つめている中、ギュンターはどんどん顔を下げる。

『邪魔するな!』

『控えろ!』

そう...一喝するんじゃないか。と皆は思った。

ギュンターがそれでも、口を開いたので。

がまた声。

「あれ...?

だがまさか人違いは無いだろう?

ギュンターって名だしその顔で金髪に紫の瞳なんて、滅多に居ない。

兄貴なんだろう?

消息不明で不肖の!

お袋にともかく連絡くらいは入れろよ!

大体、近衛に居た筈なのにどうしてそんなところに居るんだ?

別のギュンターの、代理でもしてるのか?」

ギュンターの顔がもっと下がり、殆ど髪が顔を覆うが、それでも口が開くのが、広間の皆に何とか見えた。

がまた声。

「.....あ。

内緒事か?

なんか、秘密の任務だったのか?

...だったらそれくらい連絡入れろよ!

どれだけみんなが心配したと思ってんだ!!!

大体兄貴が連絡入れてりゃ、俺だってこんな所で叫んでない!!!」

とうとうギュンターの、口が開いた。

広間は固唾飲み、静まり返る。

「...お袋にはすまなかったと、言っといてくれ。

俺は...確かに近衛だったが、突然中央護衛連隊長のポストに推薦されてここ数ヶ月は忙殺されてた」

「そんなの、言い訳に成ると思ってんのか?!
お袋の騒ぎ様を見てないだろう？
お袋に兄貴が帰らない言い訳を、俺の口から言わせる気か？
そんな高い所に居ながら、そんなに度胸無くて務まるのか?!」

これにはとうとう、くすくすと笑い声が聞こえ、一人が大声で怒鳴った。
「中央護衛連隊長だぞ？
お袋さんだって大層な出世に、文句も引っ込み息子の栄誉に感激するさ！」

「...お袋を！
知らないからそんな呑気な事が言えるんだ！
お袋はギュンターの出世なんてどうでもいいんだ！
顔に傷さえ作ってなけれや！
ギュンター！
顔に傷作ってたら幾ら中央護衛連隊長だろうが
お袋は勘当を言い渡すぜ！」

その場は突然、しーーーーん。と成った。

が、ギュンターがきっ！と顔上げる。
「良く見ろ！
傷なんて、作ってないだろう?!」

西領地(シュテインザイン)護衛連隊の面々はその、歴代中央護衛連隊長、初の素晴らしい美貌の男のその顔を、マジマジと見る。

が、末っ子ラッツェは怒鳴る。
「...目立つ傷はな！
隠してないか？
それでお袋が誤魔化せると思ったら、大間違いだぞ？」

「作ってない!!!
髭剃りせず済む様に毎日ナンの実を食べ気遣ってるし！
女にだっていつも、顔はひっかくなとちゃんと言ってある！
叩かれた事くらいあるが、腫れが引く迄いつも冷やす！
これだけ気遣ってるのに傷なんて作らないぞ！」

「...だって...近衛だろう？

戦闘が暇に成る前は激戦だって聞いたぞ？

叔父達はそれで顔にデカイ傷作って、お袋が怖いから隠れて音信不通に成ったと言い、お袋は堂々と傷晒して勘当を言わせないと、俺ですら聞くに堪えない悪口言い放題だ!!!」

「戦闘の時は他は傷だらけだが顔だけは！

毎度庇って無傷だ！

餓鬼の頃から顔庇う癖だけは付いてる！

第一顔庇ったお陰で腹に剣喰らって、しなくていい大怪我迄したんだぞ！

絶対勘当なんて言わせないからな！」

段下でぼそり...とディンダーデンが言う。

「俺が証人だ。

顔庇わなきゃ腹に喰らわなくても済んだのにな。

しかも俺が担がなきゃならない程の大怪我で、担ぎながらずっと

『お前、馬鹿だろう？』

と言い続けた」

ギュンターはディンダーデンの言葉を待って、ラッツェを再びきっ！と見る。

が、ラッツェは言い返す。

「じゃ、便りが無いのはどう言い訳する？

何通出したと思ってる？

全部、返って来て毎度使者は

『近衛にギュンターは居ません』

と言うばかりだ！

返って来る度お袋はキレて、叔父始め5才のいところに至るまで、きっとどう頑張っても消えない顔の傷をとうとう作ったか、戦闘中に見捨てられて今頃は土塊なんだ。

と噂してたのに！

手紙の一通でもくれてりゃ、ここ迄大事に成らずに済んだんだぞ！

中央護衛連隊長本部にお袋が殴り込みに来る前に、絶対顔出せよ!!!」

広間の隊員、全員が見てると、壇上のギュンターは項垂れきった。

「.....手紙が来てもいい頃だとは...思ってた。

おかしいと思ったら.....。

忙しくて...近衛から中央護衛連隊本部に転送手続きするのを、忘れていた.....」

「お袋に、その言い訳が通用するといいな！」

ギュンターが、がっくり。と首を垂れたのを、広間の全員が見た。

誰も彼が気の毒すぎて、『挨拶を』と言い出す者は、居なかった.....。

-END-